

JSL 児童が初めて参加する在籍学級での国語科授業

宮崎柊人 (琉球大学)

1. 対象児童の課題と授業の目標

本発表では、JSL 児童が在籍する沖縄県内の公立小学校 6 年生の一学級（児童数 27 名、うち JSL 児童 1 名）を対象に実践した国語科授業について報告する。対象学級に在籍する JSL 児童（以下、児童 A）は、これまで在籍学級が国語科の授業時は日本語教室での取り出し指導を受けていたため、今回が初めての在籍学級での国語科授業への参加となる。

児童 A は特に「書く」ことを苦手にしており、板書内容や自分の考え、授業の振り返りをノートに書き記すことに時間を要している。また、自分の意見や考えを持つことはできるが、授業中に誰かに話したり伝えたりしようとせず、自ら発言する機会が少ない。そこで授業実践では、児童 A が在籍学級での国語科授業に参加し学習内容を理解することを目標に、「書く」ことへの負担を軽減するために ICT 機器を活用し、発言する機会や学習内容の理解を図るために協働学習を積極的に取り入れた。

2. 授業実践の概要

2.1 授業実践内容

国語科 6 年生の「『鳥獣戯画』を読む」単元の第 1 時授業を実践した。本単元について、児童 A は日本の漫画やアニメに興味関心を持っており、教材文中に「『鳥獣戯画』は漫画やアニメの祖である」という記述がある。そこで、児童 A の興味関心を教材文にひきつけることができると考え、本単元を選定した。授業では、鳥獣戯画と漫画・アニメの特徴をそれぞれ確認したのち、鳥獣戯画と漫画・アニメの絵を並べて提示し、それぞれの絵の共通点や相違点を見つけてまとめる活動をグループで行った。その際、児童が所有している iPad にワークシートを送信し、各グループで iPad のワークシートに直接書き込みながら活動を進められるようにした。そして、グループワーク後はワークシートを回収し、電子黒板で全体に共有しながら各グループで話し合った内容を発表してもらった。

2.2 児童 A への支援

対象学級の担任は普段の授業から ICT 機器を積極的に活用しており、児童 A は iPad を活用した授業に慣れている。一方、教科によって学習ノートを使用することもあるが、児童 A がそもそも何を書けばいいのか理解できていない様子や、書くことが分かっているにもかかわらず書くことが難しい様子を見るがあった。そこで、児童 A が普段の授業から使い慣れている iPad でワークシートを配布し、ワークシートには授業を通して考えてほしいポイントに絞って書く欄を設けた。そして、どこに何を書くのかを分かりやすくするため、書く場所を色分けして視覚的に理解できるようにした。

また、児童 A は自分の考えや意見を文字にして書き表すことが難しいため、「話す」ことで自分の意見や考えを他者に伝えられるようになるのではと考えた。そこで、児童 A が授業中に自分の意見や考えを伝えやすい環境にするため、授業では積極的にグループワークを取

り入れた。グループワークの実施にあたり、児童Aとともにグループワークに取り組む児童を学級担任と児童Aと十分に相談したうえで決定し、児童Aと学校生活の様々な場面で関わりのある児童（以下、児童B）と、他の学級の児童との学び合いに積極的に取り組む児童（以下、児童C）の3名でグループを構成した。

2.3 授業時の児童Aの様子

児童Aの興味関心に合わせて好きな漫画・アニメの絵を教材として用いたこともあり、これまでの在籍学級での授業と比較して児童Aは意欲的に授業に参加していた。グループでの活動時には、児童Aは積極的に自分の意見や考えを話すことができていた。また、児童Bは「Aはどう思う？」と児童Aの意見や考えを積極的に引き出そうとする姿勢が見られ、児童Cは児童Aがグループワークの進捗や内容理解についてきているか何度も確認する様子が見られた。

授業後の振り返りでは、児童Aは「たのしかったし、グループでべんきょうしやすい」と協働学習の効果と、「iPadを使ったほうがかんたんになる」と授業を受けるうえでのICT機器活用の重要性を挙げた。また、学級の児童の授業の振り返りからも、「グループワークでは新しい考え方や分からないところを聞けるからよかった」「iPadでまとめやすくてよかった」と協働学習とICT機器活用の効果が挙げられた。さらに、児童Aとともにグループワークに取り組んだ児童B、児童Cからは、「児童Aの考えを聞いてこういう考えもあるんだと思った」「児童Aは面白い意見があるので、聞いてて楽しかったし自分の考えも深まる気がした」と児童Aとの協働学習を通して学びの進展があったという好意的な振り返りが見られた。

3. 考察

児童Aへの支援として取り入れた協働学習について、児童Aにとって1人では学習や理解が難しい内容でも、グループの児童の助けや支援があれば理解することができるようになり、学習意欲の向上や学習への動機づけへとつなげることができたと考える。また、グループワークの実施にあたって児童Aのグループの編成を考えたが、誰とともにグループワークを行うかが重要であり、児童Aの日本語能力の発達の足場かけになるようなグループの編成が必要であると考えた。次に、ICT機器の活用について、ワークシートをiPadで配布したことについて児童Aは「消しやすいいからいい」と振り返り、児童Aの「書く」ことへの負担を軽減する支援として効果的に働いた。また、ICT機器を活用することで、書く時間を思考する時間にすることができ、児童Aが学習内容を理解するための時間につなげることができたと考える。以上、協働学習とICT機器の活用によって、児童Aが在籍学級での授業に参加し理解することができるという目標は概ね達成された。

一方、児童Aが全体の前で発表することに対する支援と、国語科の他の単元や他の教科学習における学習効果の検証という点で課題が残る。児童Aは全体の前で発表すること自体を嫌っていたように見えたため、教師の声かけなどの情意面での支援や様々な形式の発表方法についての検証が必要である。また、授業を実践した単元は児童Aの興味関心に合わせた単元であり、他の単元学習でも同様の学習効果を上げることができるかという点で疑問が残る。さらに、実践授業で取り入れた協働学習やICT機器の活用といった支援が、他の教科学習においても学習効果を示すのかを明らかにすることができなかつたため、各教科の学習内容を理解したうえで、JSL児童生徒の支援としてどのような方法が効果的であるかを検証する必要がある。